



PipeLine

特集

分科会

「外国語分科会」
「日本語・日本事情分科会」



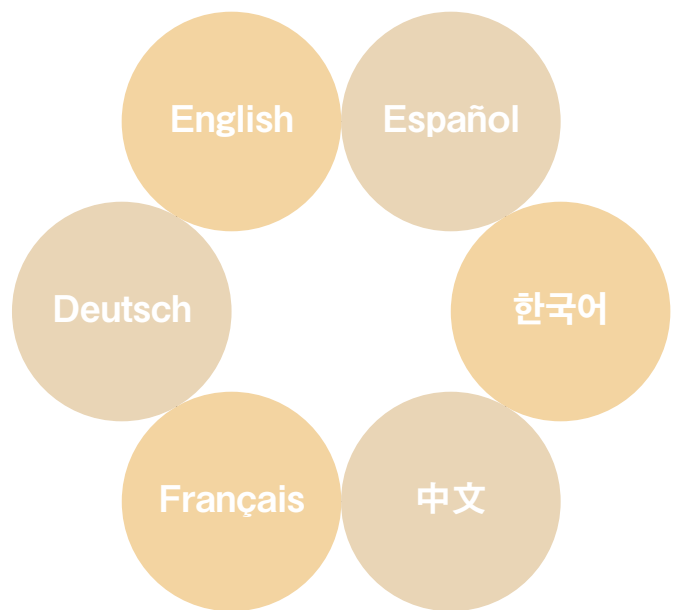
No.62 Contents

特集	分科会 1「外国語」 2「日本語・日本事情」	P1 P3
教養のページ	科学成果の報告のあり方	P6
FD部会より	良い授業ってどんな授業？	P8
共通教育実施委員会からのお知らせ	KULASが新しくなりました	P10

1 外国語

こんにちは。人文社会科学部の西尾です。誰が読んでくれているのかな？とりあえず、共通教育の授業を受けている学生の皆さんが読んでくれていると思って書きます。私は、共通教育の授業では大学英語入門などを担当しています。クラスの規模は40名程度です。なので、顔と名前を知っているという人が稀にいるかもしれません。まあまあの小物で、キャンパスの片隅にひっそりと生息しています。こんなところにしゃしゃり出て記事を書くなんて、烏滸がましい。それでもこれも何かの縁、しばらくお付き合いください。外国語分科会の活動を知ってもらうため、カリキュラムのこととか、FDのこととか、ぼそぼそ書いていこうと思います。

まずは、カリキュラムについて。高知大学の共通教育では、初年次科目として「大学英語入門」「英会話」が、教養科目の外国語分野として英語とドイツ語、フランス語、中国語、韓国語〈朝鮮語〉、スペイン語の6言語の授業が開講されています。英語は小学校からの長いお付き合いですが、それ以外の5言語は、「初修外国語」と呼ばれているように、大学に入って初めて学ぶ言語であることが多いでしょう、たぶん。どの初修外国語を選んでも、日本語や英語と比べながら学べば、その語彙や文法や表現のシステムがよく似ていたり、まったく違っていたりすることに気づき、新鮮な驚きを感じると思います。日本語と英語でも、改めてシステムとして眺めてみると、感動的な発見があったりします。私は、大学に入ってから、日本語と英語の構造が鏡像関係（鏡に映した



ように反転した関係)にあるのを知って、目から鱗がぼろぼろ落ちるような気がしました。「バナナを食べた」(目的語—動詞)と ate bananas (動詞—目的語)、「東京から」(名詞—助詞)と from Tokyo (前置詞—名詞)、「敵が我が国を攻撃するという噂」(内容節—名詞)と rumors that enemies will attack our country (名詞—内容節)。ほらね、くるっと逆転しているでしょう。



次に、FD について。FD とは Faculty Development、大学の教員が授業の内容や方法を改善し、向上させるために行う組織的な取り組みのことです。もう知ってたかな。昨年度は FD 関連のイベントはなかったけれど、共通教育における外国語のあり方について外国語担当教員の間で話し合う機会がありました。実は、大人の事情(笑)で外国語担当の専任教員の数が激減しているのです。絶滅危惧種?それでもカリキュラムは維持していかなくてはならない。授業の質を落とすわけにはいかない。でも、がんばるにしても程がある。うーん、どうしたらいいの?ってことで、考えられる解決策の一つとして、オンライン教材を用いた自律的学習の導入なんかを検討されているところです。すでに moodle share 上に英語学習応援サイトがあります。もしよかったら覗いてみて。「高知大学 moodle share>コース その他>教職員・学生用>英語学習応援サイト・学生向け研究会情報」の順に開いていくと辿り着けます。BBC (British Broadcasting Corporation) の英語第二言語話者向けの放送である BBC Learning English の 6 Minute English、6 Minute Grammar、6 Minute Vocabulary など、6分間を基準にした英語コンテンツとか、割と気軽に取り組めるんじゃないかな。今年度は、外国語教育学(ドイツ語)が専門の境一三先生を講師として「新学習指導要領は大学教育にどのような変化をもたらすのか?—資質・能力論を中心に考える—」というタイトルで FD 講演会が開催されました。その講演会を聞くための予習として『外国語教育を変えるために』(境一三、山下一夫、吉川龍生、縣由衣子著、三修社)を読んでいろいろ考えました。例えば、授業で機械翻訳やオンライン辞書を活用すること。ひたすら紙の辞書を引いて和訳するような授業もありかもしれないけれど、使える便利ツールは少しでも使って、直面する課題を自分自身で解決できるようなスキルを身につけられるような授業も考えていくべきなのかなとか。

さて、字数制限1600文字を少し超えてしまった。乱文、最後まで読んでくれてありがとう。いつかまたどこかで。

外国語分科会長
西尾 美穂

2 日本語・日本事情

日本語・日本事情分科会では、「日本の社会や文化に対する理解を深め、日本語の『話す・聞く・読む・書く』の4技能を磨き、自己表現能力の向上を目指す」という教育目標の下、外国人留学生及び外国において相当期間中等教育を受けた学生に対する「日本語」Ⅰ～Ⅲ、「日本事情」Ⅰ～Ⅳを開講しています。

ここでは、「日本語」科目から日本語Ⅰと日本語Ⅲを取り上げ、具体的な授業内容の紹介と「日本事情」科目での取り組みについて紹介していきます。

日本語・日本事情分科会長
大塚 薫

日本語科目

<日本語Ⅰ>

正規生として各学部に入学者の留学生は、日本人学生と同じ教室で肩を並べて、一般教養並びに専門知識を学び、またレポートやプレゼンテーション等の課題も勿論日本人学生と分け隔てなくこなすことが求められます。そのため、それぞれの授業内容を理解し、単位を取得するには、上級レベルの日本語能力が求められます。



この状況を踏まえ、「日本語Ⅰ」は、大学の勉学において必要なコミュニケーション力、読解力、作文力等の向上に重きを置き、スピーチ、討論、調査報告、図表の解説、レポートの作成、プレゼンテーション等、さまざまな言語行動場面で使われる適切な文型表現を学習し、各テーマで自ら調べ、考えたことを文章並びに口頭で表現できるようにしていく授業です。

授業では、活動①として、各テーマに沿ってそれぞれの場面における表現パターンを学習し、その後、受講生が自らの発表において表現パターンの運用を通して、定着を図ります。発表では受講生同士に相互に質問してもらったり、評価してもらったりして、相互の学び合いを促します。これまで人前でプレゼンテーションをしたことがない留学生もいますので、本授業での発表経験を通して、本人の自信にもつながるのではないかと考えます。活動②として、リスニング、読解を通して活動①のテーマへの理解を深めるとともに、聴解力・読解力・理解力を高めることに重きを置く学習を行っています。また、機会がある折、日本語講演会への参加や学外における地域住民との交流を通して、日本語の運用力の向上を図るとともに、地域住民との交流を通して地域文化への理解の深化にも繋がる活動を実施しています。授業は全般を通して留学生のアカデミック日本語の能力の向上を目指しています。

グローバル教育支援センター
林 翠芳

＜日本語Ⅲ＞

「日本語Ⅲ」では、論理的な文章を書く力を養うとともに、自分の考え、意見を筋道立てて発表する能力の育成を目標に掲げています。レポートや論文を書く際に必要なアカデミックスキルを学ぶとともに、スピーチやディベートを実際に行い、相手の立場に立った論理的な意見の述べ方をピア活動を通して実践的に学習しています。

「日本語Ⅲ」の授業においては、受講している留学生だけでなく留学生と交流したい日本人学生や協定校で日本語を専攻している韓国や中国、台湾、インドネシア等の学生と日本語を介して交流する機会もあります。グループごとに日本人学生にサポートをしてもらい作文に対するピア・レビュー活動を行ったり、協定校で日本語を専攻している学生と Teams を通した遠隔授業で交流を持ち、相互に自己紹介をしたり、ディベートで対戦したり、一緒に講義を聞いた後その講義のテーマで討論したりと様々な活動を共有しながら自身の意見を発信していく力の育成を試みています。また、コロナ禍においては、対面とオンラインで受講する学生同士がモバイル機器のアプリ上でビデオ通話によるピア・ラーニング活動を行い、活発な話し合いが行われました。ハイブリッド型のメリットを活かし教室と海外にいる学生とのコミュニケーションを通してクラスの雰囲気が醸成され、主体的で対話的な深い学びに繋がりました。

相手を意識した論理的な発信能力を向上させたい留学生、日本人学生でも日本語教育の現場でどのような日本語が教えられているのか、留学生にどのように日本語を教えればよいのかに興味のある学生は、ぜひ授業に参加してもらえればと思います。

グローバル教育支援センター
大塚 薫



日本事情科目

<日本事情Ⅲ・Ⅳ>

「日本事情」では日本の社会や文化について、実際に調べたりディスカッションをしたりすることで多角的に捉えるようになることを目的に授業を行っています。

「日本事情Ⅲ」では「日本の食」、「現代文化とポップカルチャー」など毎回テーマを決めて、学生がそれぞれのテーマに関して興味のある内容を調べ発表するという形式で授業を進めています。例えば「歴史・文化遺産」の回は、それぞれの学生が行ってみたい文化遺産に関して、歴史的背景や文化遺産として認定された理由、行ってみたい理由、高知からの交通手段について発表します。「伝統文化」の回には実際に俳句や川柳を作る活動もしています。

「日本事情Ⅳ」では新聞の投書記事を用い、日本社会の諸問題について読解やディスカッションを通じて考察するという活動を行っています。扱う投書コーナーは1本の投書記事に対して読者4人がそれぞれの意見を投書しているもので、1つのテーマに関して5人の日本人の様々な意見が掲載されています。テーマは「夫婦別姓」「カタカナ語」「働きやすさ」など身近なものを多く扱っています。授業では1つのテーマに関する日本人の多様な意見を踏まえたうえで、それぞれの出身国の事情はどうか、自分はどうか考えるかなど、ディスカッションをし、授業後にはディスカッションを通して考えたことをTeamsにアップロードしてお互いにコメントしあいます。受講生からは、日本人の様々な考え方を知れて興味深いという意見や、多様なテーマに関するディスカッションが様々な国籍の学生との絆を深めることにつながったという意見が聞かれました。

これからも「日本事情」の授業では、留学生が日本への理解を深めるとともに、留学生同士が絆を深められるような授業運営を心掛けていきたいと思えます。

人文社会科学部
渡辺 裕美



科学成果の報告のあり方

理工学部 加藤 治一

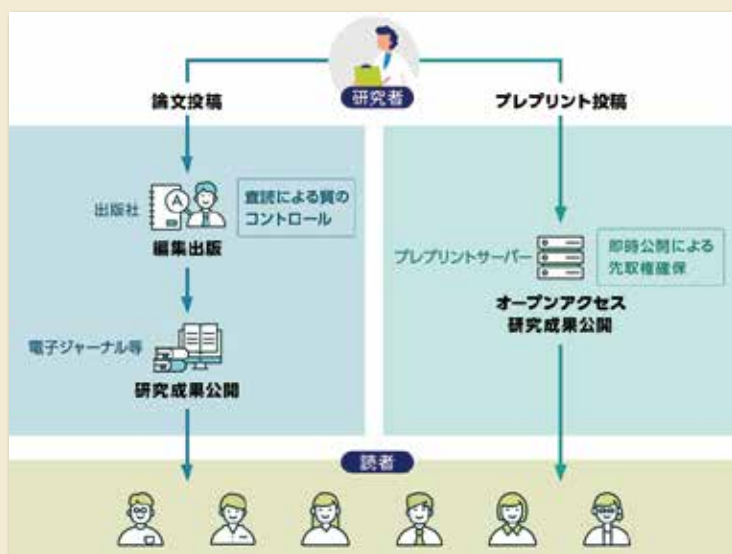
つい最近—— 2023年の7月に、材料科学のある研究グループが、LK-99なる物質が常温超伝導体であると主張する報告をなしました (ArXiv, 2307.12008 ; ArXiv, 2307.12037)。もしこれが事実ならば、間違いなく科学界・産業界に大きな変革をもたらす内容であることから、一般のニュースサイトにも取り上げられるなど話題になりました。分野の専門家の中では、他の研究者による追試が成功していないことなどから (現時点では) 報告に否定的な見方が多くなっているのですが、ニュースに対する一般の人のSNS等での反応を見ていく中で、発表の“内容”を議論する以前の段階で、発表の“やり方”についてなにか誤解があるようなコメントをいくつか見かけました。当記事では、報告の内容云々の話はさておいて、自然科学における成果報告がどのようなものであるかという、そのありかたの方を絞って、特に学術誌・プレプリントサーバーといわれるものを簡単に紹介したいと思います。自分の分野 (実験物理学) からみた話ですので、科学界一般に敷衍できる話ではないかもしれません。



科学のベースとなる思想をひとつ私見であげるならば、「みんなで知識を共有して、みんなで考えよう」となります。科学的な知識は発見した個人にとどまらず、究極的には人類全体に共有されるべきものです。ただ、当然ですが世界の全員が、すべての事象に関して通暁することはできません。現実の制約の中で、科学界は知識の共有にむけたシステムを発展させてきました。近年で重要な役割を果たしているのが学術誌 (Journal) です。研究成果は通常、発見した研究者によって論文としてまとめられ、対応する分野の学術誌に投稿されます。学術誌としては、投稿された論文をすべて載せてしまうと真偽さだかならぬ情報も含まれてしまいますし、量が溢れて大事な知識が埋没してしまいます。そこで多くの学術誌では審査を行い、一定の質を担保しながら掲載する論文を精選しています。この審査は、・成果に学術的な意味があるか ・研究が適切な科学的手法に基づいて行われているかなどの観点に基づき、分野の研究者 (投稿者とは別の、学術誌によって適切に選ばれた研究者) が行います。この審査は科学者の社会的責務の一つとして無償で行われ、読者 (および著者) には匿名ですがある意味で科学者集団を代表する形で実施されます。つまり学術誌に掲載される成果は、科学者集団から一定の保証があるものとなります。

みんな みんなで 知識を共有して、 みんな みんなで 考えよう

現在の学術誌システムにもいくつか限界があります。多くの学術誌は商業化されており、その収益元としては投稿者による投稿料および読者からの購読費などがあります。しかし特に最近、これらの費用は高騰する情勢となっており、研究者・読者が学術誌にアクセスしづらい状況があります。これは、「みんなで知識を共有して、みんなで考えよう」の理念からは反する大問題です。また別に、学術誌システムでは審査に時間がかかるという問題もあります。これらの問題から、商業誌以外での知識の共有方法が一部で模索されており、その一つにプレプリントサーバーがあります。学術誌と同じように投稿される論文をまとめ、公衆に読んでもらうという点では同じですが、投稿されるプレプリント（審査を受ける前の論文はこのようによべれます）は審査なしですべて掲載し、また読者からは購読料をとらないという点が異なります。研究者からは、特に研究成果を早く公開したいときなどの投稿先として使われており、いくつかのプレプリントサーバーが歴史をもって運用されています。ただしプレプリントは、分野の研究者集団からの審査を受けていないという意味において、質が保証されたものではありません。



冒頭の常温超伝導体に関する報告は、プレプリントサーバーの一つであるArXivを通じて報告されたものです。速報性から、分野のなかであっという間に情報が駆け回りました。取り上げられた物質に関して、他の研究グループからも新たなプレプリントが1ヶ月も経たないうちにいくつも発表されましたし、追試も短期間ですぐに行われました（ただし先述のように、報告を再現するには至っていません）。このような状況は、みんなで知識を共有し発展させていくという科学の理念からいうと、むしろ望ましいのかもしれませんが。インターネットなどの情報技術発達の中で、科学成果の報告の形もこれから変わっていくでしょう。質の保証と、速報性、経済性などの様々な方面のバランスを取りながら模索が続いていくと思います。皆様も、科学成果をみるときに、その内容ばかりでなく、それがどのように発表されたかという媒体の方に少し気を配ってみてください。

良い授業って どんな授業？

共通教育実施委員会 FD 部会長
波多野 慎悟

FD部会長を務めている理工学部の波多野です。FDとはFaculty Development (ファカルティ・ディベロップメント)の略で、教員の教育能力を高めるための組織的な取り組みのことを表します。FD部会は、共通教育の各分科会のFD活動を支援しています。

教育能力を高めるための取り組みというのは、学生に対する教育効果・学習効果を高める取り組みと言えます。つまり、教員が良い授業をするための方法を考え、実践することが、結果的に教員自身の教育能力向上につながります。

では、「良い授業」とはどういうものなのでしょうか？ここからは私の経験に基づく、「良い授業」に大事な要素を挙げていきます。

●見やすく、聞きやすい授業

授業は学生が見て、聞いて、学ぶためのものなので、学生が見える文字の大きさで、聞こえる声の大きさを授業を進行することが大事です。声の大きさや滑舌については意識していても限界があるかもしれませんが、見やすい文字で示すことは誰でもできる気遣いだと思っています。

●授業の進め方

プロジェクターを使って投影するのか、板書で授業を進めるのか、学生はノートに書くのか、配布資料に書くのか、どういう形式で授業を進めるのかによって、授業の受けやすさは変わります。昔、パワーポイントで作成した資料をプロジェクターに投影した場合と、その資料を用いて板書で授業を進めた場合の時間を調べたことがあります。その結果、板書で進める方が、2倍近く時間がかかりまし

た。板書で進める授業で学生がその内容をノートに写すことはできますが、パワーポイントを使った授業で学生がその内容をノートに写すことは非常に大変だと言えます。

●メリハリ

学生が疲れない、眠くならない工夫として、授業中にちょっとした変化を加える手法があります。授業の流れの中に強弱をつける、少し雑談を挟む、ちょっと一息つく時間を作る、グループワークの時間を作る、学生に時々質問する、など色々な変化のつけ方があると思います。

私自身は学生時代、先生が指してくるような授業の緊張感が好きだったのですが、教員になって授業で実践してみると、そういう緊張感に耐えられないという学生もいることに気づきました。そのため、「誰かわかる人!」というような投げかけ方はしますが、指名して質問することはしないようにしています。

グループワークは授業の性格によって導入しやすい場合と、しにくい場合があります。導入した授業では、学生たちは楽しそうにグループワークしている印象です。メリハリだけでなく、能動的な学習という面でもグループワークの導入効果は高いのかなと感じます。ただし、関係性が築かれていないグループワークが苦手という学生もいるので、そういった注意は必要だと思います。

●課題

授業の最後に重要な部分を理解してもらうための課題を出すことがありますが、提出物に〇×をつけて返却するだけでは、学生はどこで間違えたのかわからないままになってしまふことがあります。自分で考えて正解にたどり着いてもらいたいという気持ちもありますが、より多くの学生に理解してもらうために、課題を出した後には解説をする方が良いと考えています。

私の授業ではこれらの要素を意識して授業を実施していますが、本当に「良い授業」になっているかは分かりません。学生が思う「良い授業」と教員が思う「良い授業」が乖離していることも良くある話です。正解はないのかもしれませんが、学生・教員双方にとっての「良い授業」へと近づけていくことはできるはずで、学生への授業アンケートや教員の相互授業参観などのFD活動は、自分の授業について客観的に眺めて、より良いものへと改善するための大事なツールになります。

学生の皆さんには手間かもしれませんが、教員から授業アンケートを求められた時には回答のご協力をお願い致します。



KULASが新しくなりました

高知大学 学務課全学・共通教育係

令和5年9月1日から新しい教務情報システムを使用することになり、KULASのページも一新されました。旧KULASでは学外で利用できるメニューに制限がありましたが、新KULASでは学内・学外問わず同じメニューを利用できます。スマートフォンの画面表示にも対応していますので、どこからでも最新の情報を気軽に取得できるようになりました。

その他にも、マイリンク設定をすることで、アクセス頻度が高いページにすぐアクセスできるようになっていたり、お知らせを年度で区切られるようになっていたり、細かな面で利便性が向上しています。

注意点としては、履修登録の際、履修科目を追加しただけでは完了になりません。科目追加後、必ず画面右下に表示される「申請」ボタンを押すように気を付けてください。

今後も皆さんにとって、少しでも使いやすいKULASになるよう努めていきます。ぜひ1日1回はKULASにログインして、情報を確認してください。

KULAS ログインページURL

<https://kulas.kochi-u.ac.jp/portal/Account/Login>



KULAS ログインページQRコード

●PC画面



●スマートフォン画面



編集後記

実は、共通教育の実施体制は来年度からバージョンアップします。学生の皆さんの眼には映っていなかったのですが、密かに(?)改革が進んでいたのです。大小様々な改革ポイントがありますが、最大の眼目は、変化する時代を力強く生き抜く知力を涵養すること、にあるといえます。情報や数理関係の科目の拡充を含んだ、新たなカリキュラム体制に乞うご期待!(Y)



高知大学共通教育広報誌  [ハイブライン] **PipeLine No.62**

発行 / 高知大学共通教育実施委員会
 編集 / 共通教育実施委員会広報部会
 〒780-8520 高知市曙町2丁目5-1
 ☎088-844-8168(学務課全学・共通教育係)
 発行日 / 2023年10月
 制作 / (有)西村謄写堂

□広報・記事についてのご意見をお待ちしています。
 Mail : gm06@kochi-u.ac.jp